

1. 『大和葛城宝山記』の冒頭の神話と『神皇系図』:

『大和葛城宝山記』(『伊勢神道』(「真福寺善本叢刊」第二期第八卷、二〇〇五年、京都、臨川書店)の伊藤聡氏の翻刻 p. 617-618, 619) 冒頭:

• 神祇

蓋聞、天地成意、水気變為天地。十方風至相對、相觸能持大水。水上神聖化生、有千頭二千手足。名常住慈悲神王、為葦綱。是人神齊中、出千葉金色妙宝蓮花。其光大明、如万日俱照。花中有人神、結跏趺坐。此人神、復有無量光明。名曰梵天王。此梵天王、心生八子。々々生天地人民也。此名曰天神。亦称天帝之祖神也。

• 天神上首

天御中主尊〔傍注:『伊勢止由氣大神』〕(無宗無上而独能化。故曰天帝之神〔傍注:『尸棄大梵天王』〕〔中略〕

〔中略〕

• 伝曰、

劫初在神聖。名常住慈悲神王。(法語曰、尸棄大梵天王。神語名天御中主尊。)大梵天宮居焉。為衆生等、以広大慈悲誠心。故作百億日月及百億梵天。而度無量群品。故為諸天子之大宗、三千大千世界之本主也〔傍注:『一千世界梵王、二千世界梵王、三千大界梵王、各三等三千界主為極尊也。』〕

『神皇系図』(『伊勢神道』(「真福寺善本叢刊」第二期第八卷、二〇〇五年、京都、臨川書店)の牟禮仁氏の翻刻 p. 629-630, 631) 冒頭:

国常立尊

古天地未剖^{ワカレ}、陰陽不分^{マロカレタルコト}、渾沌^{クモリテ}如鷄子^{クモリテ}、溟

滓^{スミアキラカナル}而含牙^{タナヒイテ}。及其清陽^{スミアキラカナル}者薄靡^{タナヒイテ}而為

天^{ツクシテ}、重濁^{クハシクタヘナルカアヘルハアフキヤスク}者淹滯^{ツクシテ}而為地^{ツクシテ}。精妙^{ツクシテ}之合搏

易^{コレルハカタマリカクシ}、重濁^{コレルハカタマリカクシ}之凝竭^{コレルハカタマリカクシ}難。故天先成而地後

定。然後神聖生其中焉。号国常立

尊矣。亦名无上極尊。亦名曰常住瓊尊^{ヒソム}。

謂惟三世常住妙心、法界体相大智也。故

天神地祇本妙、大千世界大導師是尊

也。所形^{アラハルシ}名曰天御中主神。亦尸棄大梵天

王^{ナリユフ}。故則為^{アルシ}大千世界主^{アルシ}矣。

天御中主尊 〔中略〕

〔中略〕

都八柱神者、天御中主神宝座之内独化^{ホウ トケノ}

神也。明^{アラハシユテ}、百億須弥、百億日月、百億四天下、而為^{アラハシユテ}

天地人民化生元祖者也〔云々〕

なお、以下の典拠を参照。

『大智度論』T. XXV 1509 viii 116a5-11 :

復次劫尽燒時一切皆空。衆生福德因緣力故。十方風至相對相觸能持大水。水上有一千頭人二千手足。名為韋紐。是人臍中出千葉金色妙宝蓮花。其光大明如万日俱照。華中有人結加趺坐。此人復有無量光明。名曰梵天王。此梵天王心生八子。八子生天地人民。

T. XXXIV 1721 i 464c19-25 『法華義疏』吉藏 隋:

手擎鷄持鈴捉赤幡騎孔雀也。問十地經云摩醯千世界主。今云何言初禪梵王爲三千世界主。答有四種梵王。一者經云。百億日月百億梵王百億非想此是下品梵王也。二者智度論云。梵王千世界主。長阿含亦然。此是次品也。三者九地菩薩作梵天王領二千世界。此是上品也。四者領三千大千世界。此是上上品也。

T. LXXV 2396 i 435a27-b3 『真言宗教時義』安然:

三論云。金光明云百億梵王即初禪梵王。是下品也。十地經云摩醯首羅千世界主。即二禪梵王。是中品也。九地菩薩作梵王二千界主。即三禪梵王。即是上品。若三千界主居百億日月中央即四禪梵王。是上上品云云

『宝山記』: 心生八子

『神皇系圖』: 八柱神

『宝山記』: 生天地人民

『神皇系圖』: 天地人民化生

『宝山記』: 故作百億日月及百億梵天

『神皇系圖』: 百億須弥、百億日月、百億四天下

etc.

2. 『阿娑縛抄』に引かれた安然「摩利支要記」とその典拠:

『阿娑縛抄』TZ. IX 3190 cxlv 467c3-486a19

[467c3] 摩利支要記(安然)云。不空譯。摩利支天儀軌

云。摩利支天菩薩者。是大日三昧耶故入

[c5] 於日喻三昧。即日天眷屬 天台宗所立

法華經文云。娑婆世界主梵天王者學位。

次文云尸棄大梵者學位也。大般若云。娑

婆世界者。螺髻梵王。梵謂尸棄。天台所言

[c10] 之証是也。法相宗所立法花玄贊云。尸棄

大梵是小千界主也。光明大梵者第二禪

主也。等者等取也。三千界主最初娑婆世

界主大梵天王者。是第四禪定主也。所謂

摩醯首羅大梵。是則一切衆生父也。所以

然者。壞劫時起天三災悉破壞第二第三

[c15] 禪等訖(文)。但不_レ至_レ第四禪定_レ故。此天王時。

魔羅幢攝_レ治一切衆生精氣_レ。故下界無_レ有

情。三論宗天台宗所立不_レ異。而法相大乘

所立者。是瑜伽論文也。天台三論二宗所

立者。龍樹師所造智度之文也。但光音天

[c20] 下_レ化於瞻部界_レ。生_レ一子_レ。所謂毘摩質多羅
阿修羅王。是阿修羅王生_レ一女子_レ。其形如_レ
天女_レ。端嚴甚微妙也。其名曰_レ舍脂_レ。以_レ此女_レ
欲_レ爲_レ羅嚧阿修羅王妾_レ也。帝釋天王以_レ神
通_レ取_レ此。將_レ至_レ忉利天上_レ。召_レ毘首羯磨天_レ。令

[c25] 造_レ喜見城_レ。經_レ人間七日_レ。頃造_レ一萬間舍_レ。訖。
即以_レ七寶_レ嚴飾。以_レ因多羅網_レ覆_レ其舍_レ。每_レ網
目_レ有_レ萬億鈴_レ。鈴光鈴音合_レ於_レ一_レ。即此舍脂
女_レ囚置_レ中寢。時二阿修羅王起_レ引_レ兵_レ。列_レ

[c29] 見大海上_レ。諸阿修羅王并百千萬軍衆集
[468a1] 會。其影蔭現_レ海水底_レ。其數不_レ可_レ究盡_レ。爲_レ奪_レ
彼舍脂女_レ。上_レ天帝宮時_レ。日月天子放_レ淨光_レ。
照_レ耀修羅王兩眸子_レ。羅嚧阿修羅王以_レ
手欲_レ執_レ日月天子_レ。摩利支天菩薩有_レ大勢

[a5] 方便。故現_レ人間三歲小兒形_レ。覆_レ翳日月天
宮_レ。令_レ威猛修羅王迷惑_レ。亦吾以_レ隱形法_レ不_レ
令_レ知_レ日月天子及修羅王_レ。恆令_レ帝釋天王
悉摧破修羅王軍衆_レ（或說云。摩利支天爲_レ助_レ護天帝日月_レ。恆隱_レ其形_レ。懸_レ前
如_レ微鳥竹籠_レ。現_レ其世界之形相_レ也）帝釋天每月十六日講_レ演大

[a10] 品般若。般若十六神王首深沙大王領_レ引
七萬阿僧祇眷屬_レ。持_レ智劍_レ。須臾頃割_レ裁修
羅軍陳若干眷屬_レ。即修羅王等五體墮_レ大
海水上_レ。如_レ微塵數_レ。時修羅王衆。練_レ不死藥_レ。
含_レ牙齒中_レ。不_レ敢散失_レ。各有_レ自通力_レ。擇_レ取微

[a15] 塵身體_レ。如_レ故活續。歸_レ往本宮_レ。如_レ此恆時雖_レ
受_レ苦因_レ勝他心_レ深禁故。每月十六日鬪諍
無_レ已。故天帝渴_レ仰般若力_レ。一切諸佛權化
皆應_レ稱_レ帝釋天所勢_レ。是故摩利支天菩薩。

[a19] 以_レ大方便神通力_レ助_レ護天帝_レ也。

『白宝口抄』卷第一百五十二 (TZ. VII 3119 clii 278b18-c28):

[278b18] 安然真言密要記云。三千界主者。最初娑
婆世界主。大梵天王者第四禪定主也。所
[b20] 謂摩醯修羅也。則一切衆生父。壞劫時起
大三災。壞第三禪等訖不至第四禪。故天王
持魔羅幢。攝治一切衆生精氣。故下界無
有情。但光音天下化於瞻部界生一子。
所謂毘摩質多羅阿修羅王。是生一女子。形
[b25] 如天女。端嚴甚微妙。其名曰舍脂。此女欲
爲羅嚧阿修羅王妾也。帝釋天王以神通

- 取此女。至忉利天召瓊首羯磨天。造喜見城經人間七日。造一万間舍訖。以七寶嚴飾。以因多羅網覆其舍。即令舍脂女囚置中覆。時二修羅起四兵。列大海上。修羅王并百千軍衆影陰現海水底 爲奪舍脂女。上帝釋宮。時日月天子放淨光。照耀修羅王兩眸子。羅嚧阿修羅王以手欲執日月天子。摩利支天菩薩有大勢力方便。故摧修羅王軍衆（文）
- [b29] 傳受集云。不空軌云。羅嚧質多二阿修羅爲奪舍脂。上天帝宮。時日月天子放淨光。照修羅眼。修羅以手欲執日月。摩利支
- [c1] 有大勢力方便。現歲兒形翳日月宮。令修羅迷惑。今以隱形法不令知日月天及阿修羅王（云々）又云。摩利支助衛天帝日月。恒隱其形懸日月天子前。如微鳥竹籠（云々）（本文可見）
- [c5] 類聚抄云。威光菩薩 常居日宮。除阿修羅難（云々）
- [c10] 安然真言密要記云。每月十六日羅嚧阿修羅王。毘摩質多羅阿修羅王。劫初時有約。鬪爭無止。天帝渴仰般若力。一切諸佛權化皆應稱帝釋天所勢。是故摩利支天以大方便神通力助護天帝也。又云。帝釋天每月十六日講演小品般若。般若十六神王。首深沙大王領列七萬阿僧祇眷屬。持智劍須臾頃割裁修羅軍。即修羅五體墮大海上如微塵。時修羅王衆練不死藥。含牙齒中不敢散失。有自通力。擇取微塵身體。如故活續歸本宮。恒時雖受苦因勝他心深禁。故鬪
- [25] 爭無止（云々）
- [c28] 爭無止（云々）

『白宝口抄』卷第百五十二（TZ. VII 3119 clii 280c12-16）：

- [280c12] ... 主上稱天子。天子者日也。故摩利支天加護帝位。是即金輪應用德故也。不空三藏造白檀摩利支天像。并書大佛頂陀羅尼。爲王子御護被進。見表制集。
- [c15] 又玄宗皇帝入灌頂壇時。始受此法（云々）
- [c16]

『白宝口抄』卷第百五十二（TZ. VII 3119 clii 281a25-b15）：

- [281a25] 安然真言密要記云。阿修羅王并百千萬軍衆集會。其影蔭現海水底。其數不可究

盡。爲奪彼舍脂女上天帝宮。時日月天子
 放淨光。照耀修羅王兩眸子。羅嚧阿修
 [a29] 羅王以手欲執日月天子。摩利支天菩薩
 [b1] 有大勢方便。故現人間三歲小兒形。覆翳
 日月天宮。令威猛修羅王迷惑。亦吾以隱
 形法不令知日月天子。阿修羅王恒令帝
 釋天王悉摧破修羅王軍衆（云々）又云。摩
 [b5] 利支天。恒隱其形。懸日月天子前。如微鳥
 竹籠。現其世界之形相也（云々）又云。作隱
 形印當心。念誦一百八遍。依此印真言加
 持力故。一切天魔惡鬼不善邪魔外道不
 得其便。亦無見其行者形體。雖求不見空
 [b10] 盡邪力。終不得見持修者（云々）
 又云。每七種所行時以印言（隱形印言）可加持。
 七種所行時者。一睡眠時。二覺寤時。三沐
 浴時。四遠行時。五逢客時。六飲食時。七行
 廁時。以身印加持五處。以隱形印想。隱入
 [b15] 金剛堅固智拳城（云々。已上）

『阿娑縛抄』所引、安然「摩利支要記」の典拠：
 「不空訳。摩利支天儀軌云。摩利支天菩薩者。是大日三昧耶故入於日喻三昧。即日天眷屬」：
 「日喻三昧」は印度・中国撰述部に見つからない。しかし、『大日経疏』に
 1796_39,0618c19(04):日喻本淨菩提心。即是毘盧遮那自體。
 という箇所があり、『菩提心義』（海運）にも、
 1953_46,0988a12(05):何所養育。又云。日喻本淨菩提心。
 1953_46,0988a13(00):即是毘盧遮那自體。
 という箇所がある。

「日天眷屬」：
 T. XXXIX 1796 v 634b18-23 『大毘盧遮那成仏経疏』一行 唐：
 釋天眷屬之南。置日天衆。在八馬車輅中。并二妃在其左右。所謂誓耶微。誓耶。譯云勝無勝也。日
 天眷屬布諸執曜。瓊伽在西。輸伽在東。勃陀在南。勿落薩鉢底在北。沒備沒遮在東南。羅嚧在西
 南。劍婆在西北。計都在東北。又於南緯之南置涅伽多。謂天狗也。

「天台宗所立法華经文云。娑婆世界主梵天王者學位。次文云尸棄大梵者學名也」：
 T. XXXIV 1718 ii.2 24b21-c4 『妙法蓮華经文句』智顛 隋：
 梵者此翻離欲。除下地繫上升色界故名離欲。亦稱高淨。尸棄者此翻爲頂髻。又外國喚火爲樹提尸
 棄。此王本修火光定。破欲界惑。從德立名。然經標梵王。復舉尸棄。似如兩人。依釋論正以尸棄爲
 王。今經學位顯名。恐目一人耳。住禪中間內有覺觀外有言說。得主領爲王。單修禪爲梵民。加四無
 量心爲王也。初禪有梵衆梵輔大梵。今舉王攝諸也。光明者二禪也。此有少光無量光光音。三禪有少
 淨無量淨遍淨。四禪有密身亦無挂礙無量密亦受福密果亦廣果無想密亦無想。又有五那含。不煩不熱
 善見善現色究竟亦大自在即摩醯首羅。

また

T. XXXIV 1721 i 464c7-11 『法華義疏』 吉藏 隋:

娑婆世界主者摩醯首羅第四禪梵王也。尸棄者三禪梵王也。光明者二禪梵王也。等者初禪梵王也。今依智度論第一卷云。娑婆世界主梵天王名尸棄。娑婆世界主。此舉處以顯其爲主也。大梵天王出其位也。尸棄者標其名也。

も参照。

「大般若云。娑婆世界者。螺髻梵王。梵謂尸棄。天台所言之証是也」:

T. VIII 231 iv 710a20 『勝天王般若波羅蜜經』 月婆首那 陳:

娑婆世界主尸棄梵王。與六十八萬梵天。

また

T. III 187 x 603a29 『方廣大莊嚴經』 地婆訶羅 唐:

爾時娑婆世界主螺髻梵王以佛威神。

が念頭にあるかもしれない。

「法相宗所立法花玄贊云。尸棄大梵是小千界主也。光明大梵者第二禪主也。等者等取也。三千界主最初娑婆世界主大梵天王者。是第四禪定主也。所謂摩醯首羅大梵。是則一切衆生父也。所以然者。壞劫時起天三災悉破壞第二第三禪等訖(文)」:

T. XXXIV 1723 i 675c6-21 『妙法蓮華經玄贊』 窺基 唐:

經娑婆世界主至二萬天子俱贊曰。此色界天。梵云索訶此云堪忍。諸菩薩等行利樂時多諸怨嫉衆苦逼惱。堪耐勞倦而忍受故。因以爲名。娑婆者訛也。初禪大小等於欲界一四天下。一千初禪始等二禪。二禪爲火災頂。一千二禪始等三禪。三禪爲水災頂。一千三禪始等四禪四禪爲風災頂。乃是三千大千世界。號爲娑婆世界也。故娑婆界主大梵王。即第四禪主梵摩云寂靜・清淨・淨潔皆得。亦云梵潔也。今唯言梵但略云爾尸棄者火災頂即初禪主・火災尖頂故。光明者二禪主小光・無量光・極光淨天主故。等表三禪主也。然大般若五百七十云。堪忍界主持髻梵王故。尸棄者頂髻也。即持髻梵王是堪忍界主。梵王之別名。光明是餘禪主

「但不至第四禪定故。此天王時。魔羅幢摂治一切衆生精氣。故下界無有情。三論宗天台宗所立不異。而法相大乘所立者。是瑜伽論文也。天台三論二宗所立者。龍樹師所造智度之文也」:

T. XXX 1579 ii 285b27-c6 『瑜伽師地論』 彌勒菩薩, 玄奘 唐:

又彼壞劫由三種災。一者火災能壞世間。從無間獄乃至梵世。二者水災能壞一切。乃至第二靜慮。三者風災能壞一切。乃至第三靜慮。第四靜慮無災能壞。由彼諸天身與宮殿俱生俱沒故。更無能壞因緣法故。復有三災之頂。謂第二靜慮第三靜慮第四靜慮。又此世間二十中劫壞。二十中劫壞已空。二十中劫成。二十中劫成已住。如是八十中劫。假立爲一大劫數。??

T. XXV 1509 vii 113c16-114a7 『大智度論』 鳩摩羅什, 龍樹菩薩 後秦:

乃至十方亦復如是。【論】問曰。云何爲三千大千世界。答曰。佛雜阿含中分別說。千日千月千閻浮提千衢陀尼千鬱怛羅越千弗婆提千須彌山千四天王天處千三十三天千夜摩天千兜率陀天千化自在天千他化自在天千梵世天千大梵天。是名小千世界。名周利。以周利千世界爲一。一數至千名二千中世界。以二千中世界爲一。一數至千名三千大千世界。初千小二千中第三名大千。千千重數故名大千。二過復千故言三千。是合集名百億日月乃至百億大梵天。是名三千大千世界。是一時生一時滅。有人言。住時一劫滅時一劫還生時一劫。是三千大千世界。大劫亦三種破。水火風。小劫亦三種破。刀病飢。此三千大千世界。在虛空中。風上水水上地地上人。須彌山有二天處。四天處三十三天處。

餘殘夜摩天等。福德因緣七寶地。風舉空中乃至大梵天皆七寶地皆在風上。是三千大千世界光明遍照。照竟餘光過出。照東方如恒河沙等諸世界南西北方四維上下亦復如是。??

「但光音天下化於臚部界。生一子。所謂毘摩質多羅阿修羅王。是阿修羅王生一女子。其形如天女。端嚴甚微妙也。其名曰舍脂。以此女欲爲羅嚩阿修羅王妾也。帝釋天王以神通取此。將至忉利天上。召毘首羯磨天。令造喜見城。經人間七日頃造一萬間舍訖。即以七寶嚴飾。以因羅網覆其舍。每網目有萬億鈴。鈴光鈴音合於一。即此舍脂女囚置中寢。時二阿修羅王起引四兵。列見大海上。諸阿修羅王并百千萬軍衆集會。其影蔭現海水底。其數不可究盡。爲奪彼舍脂女。上天帝宮時。日月天子放淨光。照耀修羅王兩眼眸子。羅嚩阿修羅王以手欲執日月天子。摩利支天菩薩有大勢方便。故現人間三歲小兒形。覆翳日月天宮。令威猛修羅王迷惑。亦吾以隱形法不令知日月天子及修羅王。恆令帝釋天王悉摧破修羅王軍衆（或説云。摩利支天爲助護天帝日月。恆隱其形。縣前如微鳥竹籠。現其世界之形相也）帝釋天每月十六日講演大品般若。般若十六神王首深沙大王領引七萬阿僧祇眷屬。持智劍。須臾頃割裁修羅軍陳若干眷屬。即修羅王等五體墮大海水上。如微塵數。時修羅王衆。練不死藥。含牙齒中。不敢散失。各有自通力。擇取微塵身體。如故活續。歸往忉宮。如此恆時雖受苦因勝他心深禁故。每月十六日鬪爭無已。故天帝渴仰般若力。一切諸佛權化皆應稱帝釋天所勢。是故摩利支天菩薩。以大方便神通力助護天帝也」:

この箇所を試訳：

しかし、光音天が閻浮提に下ってきて一子を生んだ。これが毘摩質多羅（Vemacitra）という阿修羅王である。この阿修羅王が一人の娘を生んだ。その形は天女のごとく、気高く非常に美しかった。その名は舍脂（Śacī）といった。羅嚩（Rāhu）阿修羅王は、彼女を妾にしようとしたが、帝釈天は神通を用いて彼女を取り上げ、忉利天上に連れて行って、毘首羯磨天（Viśvakarman）を召して、喜見城（Sudarśana）を造らた。〔毘首羯磨は〕人間の時間で七日間で一万間の宮殿を造り終え、七宝で厳かに飾り、インドラの網で宮殿を覆い尽くした。その編み目の一つ一つには万億の鈴がついており、鈴の光とその音が一つとなって〔まことに荘嚴だった〕。舍脂女はそこに囚われて、その中で寝た。その時、二阿修羅王は四兵を引き連れて大海の上に並べ、諸阿修羅王と百千億の軍勢が集まってその影が海底に現われた。その数は数えきれず、舍脂女を奪い返すために天宮に昇っていった。その時、日月天子は淨光を放って阿修羅王の両の眸を照した。羅嚩阿修羅王は手で日月天子を掴もうとした。ところが、摩利支天菩薩は大勢力を持ち、方便によって人間の三歳の童子の姿を現わし、日月の天宮を覆い隠して、勢い猛る阿修羅王を惑わした。また、吾は隱形法によって日月天子〔の所在を〕阿修羅王に（？）知られないようにして、つねに帝釈天が阿修羅王の軍勢を摧破するようにする〔と言った〕（？）。（別の説によれば、摩利支天は天帝と日月を助け護って、つねに微妙な鳥籠がその前に懸かっているようにその形を隠し、そのように世界の形を現出させる（？）ともいう。）帝釈天は、毎月十六日に大品般若を講じ、般若十六神王と深沙大王を首領として七萬阿僧祇の眷属を引きつれ、智劍を持って、須臾の間に阿修羅軍を割裁して若干の眷属を戦闘のために配置する。すると、阿修羅王などの五体は大海の水上に落ち、微塵数のようになる。しかし阿修羅王の軍勢は不死の薬を歯牙に含み、〔勇気を（？）〕散逸することなく、おのおの神通力をもって微塵に砕けた身体を結び取って生き返り、本宮に帰っていく。彼らはこのようにいつも苦しみを受けるが、相手に勝とうとする心を深くとどめる〔？〕ゆえに、毎月十六日の鬪争は已むことがない。それゆえに、天帝は般若力を渴仰するのである。一切の諸仏や權化は皆、帝釈天の軍勢とすることができる（応称）。それゆえ、摩利支天菩薩は、大方便神通力をもって天帝を助け護るのである。

インドラがシャチーという名前のダイティヤ（ダーナヴァ）族の娘と結婚した、またその父のブローマンは、娘をさらわれたため、インドラを呪い、インドラに殺された、という神話は、ヒン

ドゥー教の神話として知られている (Dawson, *Classical Dictionary of Hindu Mythology...*)。

光音天の子孫として毘摩質多羅が生まれ、その娘の舎脂が帝釈天に嫁いだ、しかし、帝釈が宮殿の池でほかの「綵女」と楽しんでいるのを見た舎脂が、嫉妬してそのことを父に告げ、そこから天とアスラの大戦争になった、帝釈が「般若波羅蜜是大明呪」を唱えると、アスラはずたずたに切り裂かれて敗走した、という物語は、『仏説觀仏三昧海經』に語られている：

T. XV 643 i 646c14-647b11 『仏説觀仏三昧海經』 仏陀跋陀羅 東晉：

復次大王如劫初時。火起一劫。雨起一劫。風起一劫。地起一劫。地劫成時。光音諸天飛行世間在水澡浴。以澡浴故四大精氣即入身中。身觸樂故精流水中。八風吹去墮淤泥中。自然成卵。經八千歲其卵乃開生一女人。其形青黑猶如淤泥。有九百九十九頭。頭有千眼。九百九十九口。一口四牙。牙上出火狀如霹靂二十四手。手中皆捉一切武器。其身高大如須彌山。入大海中拍水自樂。有旋嵐風吹大海水。水精入體即便懷妊。經八千歲然後生男。其兒身體高大四倍倍勝於母。兒有九頭頭有千眼。口中出火。有九百九十九手八脚海中出聲。號毘摩質多羅阿修羅王。此鬼食法。惟噉淤泥及藁藕根。其兒長大。見於諸天媿女圍遶。即白母言。人皆伉儷。我何獨無。其母告曰。香山有神名乾闥婆。其神有女。容姿美妙色踰白玉。身諸毛孔出妙音聲。甚適我意今爲汝媿。適汝願不。阿修羅言。善哉善哉。願母往求。爾時其母行詣香山。到香山已告彼樂神。我有一子威力自在。於四天下而無等倫。汝有令女可適吾子。其女聞已。願樂隨從適阿修羅。時阿修羅納彼女已。心意泰然與女成禮。未久之間即便懷妊。經八千歲乃生一女。其女儀容端正挺特。天上天下無有其比。色中上色以自莊嚴。面上姿媚八萬四千。左邊亦有八萬四千。右邊亦有八萬四千。前亦八萬四千。後亦八萬四千。阿修羅見以爲衛異。如月處星甚爲奇特。憍尸迦聞即遣使。下詣阿修羅而求此女。阿修羅言。汝天福德。汝能令我乘七寶宮。以女妻汝。帝釋聞此心生踊躍即脫寶冠持用擬海。十善報故。令阿修羅坐勝殿上。時阿修羅踊躍歡喜以女妻之。帝釋即以六種寶臺。而往迎之。於宮闕中有大蓮華。自然化生八萬四千諸妙寶女。譬如壯士屈伸臂頃。即至帝釋善法堂上。爾時天宮過踰於前百千萬倍釋提桓因。爲其立字號曰悅意。諸天見之歎未曾有。視東忘西。視南忘北。三十二輔臣。亦見悅意身心歡喜。乃至毛髮皆生悅樂。帝釋若至歡喜園時。共諸綵女入池遊戲。爾時悅意即生嫉妬。遣五夜叉往白父王。今此帝釋不復見寵。與諸媿女自共遊戲。父聞此語心生瞋恚。即興四兵往攻帝釋。立大海水踰須彌頂。九百九十九手。同時俱作撼喜見城。搖須彌山。四大海水一時波動。釋提桓因驚怖惶懼。靡知所趣。時宮有神。白天王言。莫大驚怖。過去佛說般若波羅蜜。王當誦持鬼兵自碎。是時帝釋坐善法堂。燒衆名香發大誓願。般若波羅蜜是大明呪。是無上呪。無等等呪。審實不虛。我持此法當成佛道。令阿修羅自然退散。作是語時。於虛空中有四刀輪帝釋功德故自然而下。當阿修羅上。時阿修羅耳鼻手足一時盡落。令大海水赤如絳汁。時阿修羅即便驚怖。遁走無處入藕絲孔。彼以貪欲瞋恚愚癡鬼幻力故。尚能如是。豈況佛法不可思議。

智顛も『觀佛三昧海經』を引いて、この神話について述べ、それに続いてラーフが日月を食うという神話を伝えている。

T. XXXIV 1718 ii.2 25b3-29 『妙法蓮華經文句』 智顛隋：

毘摩質多此云淨心。亦云種種疑。波海水出聲。名毘摩質多。即舎脂父也。觀佛三昧云。光音天生此地。地使有欲入海洗不淨。墮泥變爲卵。八千歲生一女。千頭少一。二十四手。此女戲于水水精入身。八千歲生一男。二十四頭千手少一。海水波音名爲毘摩質多。索乾闥婆女生舎脂。帝釋業力令其父居七寶殿。納爲妻。後讒其父遂交兵。脚波海水手攻喜見。帝釋以般若呪力不能爲害。正本云燕居。本者色心本淨。迹爲此名。觀者正觀中道即是淨心。羅邏羅此云障持。障持日月者也。是畜生種身長八萬四千由旬。口廣千由旬。寶珠嚴身。觀天女天園林。若四天下人孝養父母。供養沙門者。諸天有威力。上空雨刀。若不爾諸天入宮不出。又日放光照其眼不能得見。舉手掌障日世人咸言日蝕

怪險種種邪說。掩月亦如是。或作大聲。世人言天獸吼險亂王衰。種種邪說。怖日月時倍大其身氣呵日月。日月失光來訴佛。佛告羅邏莫吞日月。羅邏支節戰動身流白汗即放日月。日月力衆生力佛力。衆因緣故不能爲害。昔有婆羅門聰明廣施。四千車載食。於曠野施。有一佛塔惡人所燒。即以四千車載水滅火救塔。歡喜發願願得大身欲界第一。既無正信好鬪愛戰喜施故生光明城。作羅邏羅。修羅主也。正本云吸氣。本觀云云。

ラーフが天女を見ようとするが、日の光に照されて目が見えなくなり、手で日の光を遮ろうとする、という話は、『正法念處經』に語られている。

T. XVII 0721 xviii 107a10-108a9 『正法念處經』 瞿曇般若流支 元魏：

復次比丘。知業果報。觀龍世間。觀戲樂城及流水龍已。觀大海底。何等衆生住在其中。即以聞慧。知大海地下天之怨敵。名阿修羅。略說二種。何等爲二。一者鬼道所攝。二者畜生所攝。鬼道攝者。魔身餓鬼。有神通力。畜生所攝阿修羅者。住大海底須彌山側。在海地下八萬四千由旬。略說四地。第一地處。二萬一千由旬。是羅邏阿修羅王所住之處。此羅邏阿修羅王。於欲界中化身大小。隨意能作。以人行善不善力故。時阿修羅作是思惟。我當觀彼怨家園林遊戲之處。與諸婬女共相娛樂。恣意受樂。思惟是已。即自莊嚴。以大青珠王。波頭摩珠王。光明威德珠王。或以金玉五色赤珠王。或以雜色衣王。若青若赤。若黃若黑。種種諸色。莊嚴其身。以爲鉀胄。光明晃赫。時羅邏阿修羅王。身量廣大。如須彌山王。遍身珠寶。出大光明。大青珠寶出青色光。黃黑赤色亦復如是。以珠光明。心大憍慢。謂無與等。欲令天女阿修羅女愛敬其身。從城中出。其所住城。名曰光明。縱廣八千由旬。無量寶林。流泉浴池諸樹蓮花。莊嚴其城。首冠花鬘。塗香白麝。散以末香。從城而起觀天園林遊戲之處。若閻浮提人不行正法。不孝養父母。不敬沙門婆羅門及諸尊長。不依法行。不奉三寶不觀善法及不善法。諸天勢力悉爲減少。四天王天展轉相告。悉避逃逝。恐師子兒羅邏阿修羅王來殺我等。若閻浮提人。修行正法。孝養父母。敬事師長。供養沙門耆舊長宿。一切諸天勢力增長。時四天王。以衆寶衣。莊嚴其身。塗香末香。即時當於師子兒羅邏阿修羅。上虛空之中。雨諸刀劍。一切天衆。心生喜悅。至須彌側。發聲大叫。若天不出。阿修羅王。欲觀園林。日百千光照其身上。莊嚴之具。映障其目。而不能見諸天園林遊戲娛樂受樂之處。時羅邏阿修羅王。作是思惟。日障我目。不能得見諸天婬女。我當以手障日光輪。觀諸天女。即舉右手。以障日輪。欲見天女可愛妙色。手出四光。如上所說。立海水中。水至其腰。寶珠光明。或青或黃或赤或黑。以手障日。世間邪見諸論師等。咸生異說。言羅邏阿修羅王蝕日。若日赤色黑色。以如是法相人壽命。不識業果諸相師等。作如是說。或言當豐。或言當儉。或言凶禍。殃及王者。或言吉慶。時阿修羅手障日已。諦觀諸天園林浴池遊戲之處。時天帝釋見是事已。勅諸天衆莊嚴宮殿。令諸天子以種種寶莊嚴其身。往趣羅邏阿修羅所。欲共鬪戰。時羅邏阿修羅王。見諸天衆。即還宮城復次比丘。云何觀月蝕。即以聞慧。知羅邏阿修羅王眷屬官衆。行於海上。見月常遊憂陀延山頂。行閻浮提。住毘琉璃光明之中。端嚴殊妙。百倍轉勝。官屬見已。即至羅邏阿修羅所。白言大王。滿月端嚴如天女面。時羅邏王。聞是語已。愛心即生。欲見天女。從地而起。渴仰欲見。以手障月。欲見天女。阿修羅王。無量衆寶。莊嚴其身。如上所說。閻浮提中呪術師等。而作呪曰。一切國土聚落城邑衆惡速滅。一切世間土地衆惡速滅。一切婆羅門中衆惡速滅。若月黑色黃色。世間相師作如是說。或言當豐。或言當儉。或言王者凶危。或言吉慶。或言兵刃勇起。或言不起。瞿陀尼。弗婆提。鬱單越。何其方面所蝕之處無邪見說。以此一因緣故。日月掩蔽。謂是月蝕。復次二因緣故。掩蔽日月。天降大聲。羅邏阿修羅王住大海下。時諸官屬白言大王。天主憍尸迦。住須彌山頂善見城內。處善法堂。諸天功德。五欲具足。眷屬圍遶。歡娛受樂。天主憍尸迦。爲諸天主。大王今爲我等所尊。王有大力。神通勝彼。可率官屬往攻。天主壤善見城。時阿修羅即受其語。奮威縱怒。出光明城。震吼如雷。閻浮提中諸國相師。謂天獸下。說如此相。或言豐樂。安隱無他。或言災儉。五穀勇貴。或言王者崩亡。或言吉慶靈應嘉祥。或言兵刃起於境內。或言人民安樂無變。或言當須齋肅潔淨拜神求福。時羅邏阿修羅王。如是思惟。我寶珠等。留此城

内。爲我諸子作大光明。若無寶珠則無光明。天上亦爾。有日月故則有光明。若無日月則應闇冥。我今寧可覆蔽日月。令天黑闇。時阿修羅思惟是已。從城而起。即以一手。覆障日月諸光明輪。世間愚人。諸相師等。咸記災祥。如上所說。復以一手。摩須彌頂。欲與諸天決其得失。是阿修羅畜生少智。見天種種勝相莊嚴。威德光明。心生疑悔。還歸所止。住光明城。是名第二因緣。掩蔽日月。令日月蝕。天聲震吼

しかし、摩利支天がラーフに捉えられそうになる日月天子を「三歳の童子」の形で隠す、あるいは「微鳥竹籠」が前に懸かるようにして世界を現出させる、という物語は、見つからないようである。また、帝釈天が毎月十六日に大品般若を講じ、般若十六神王と深沙大王を首領として七萬阿僧祇の眷属を引きつれ……、という話も、直接の典拠は見つからない。帝釈天が毎月十六日に、云々、という一節は、おそらく『四天王經』(0590_15)などの思想に基づいて発想されたものだろう。しかし、「深沙大王」ということばは大正蔵の印度撰述部と支那撰述部には見あたらず、「深沙大将」も非常に稀で、インドや中国の(多少とも正統的な)文献にはほとんど見当たらない。

3. 安然における「色界の各階層の天に相当する世界の広さ」の問題について：

T. LXXV 2396 iv 435a18-b7 『真言宗教時義』安然：

若長阿含云尸棄梵王是初禪王。此云火色。或云火頂。於大千界最得自在。亦名鳩摩羅。此云童子。顏如童子非男非女。又云持髻云云是小乘說也。若大品云堪忍界主持髻大梵。智度論云。娑婆世界主梵天王名曰尸棄大梵。住初禪中領大千界。以初禪中有覺觀故有王領義。二禪以上無覺觀義故無王領。天台禪門云。智論引小乘說。若依大乘瓔珞四禪各有梵王。即是十地菩薩爲六欲四禪王。三論云。金光明云百億梵王即初禪梵王。是下品也。十地經云摩醯首羅千世界主。即二禪梵王。是中品也。九地菩薩作梵王二千界主。即三禪梵王。即是上品。若三千界主居百億日月中央即四禪梵王。是上上品云云今眞言宗云。伊舍那天忿怒之身名魯駄羅。亦名摩醯首羅。是第六天宮魔王也。入大乘論云。摩醯首羅有二種。一伊舍那摩醯首羅。二毘遮舍摩醯首羅。前是第六天魔也。後是第四禪天王也。……

安然のこの一節の主要な典拠は

T. XXXIV 1721 i 464c2-465a2 『法華義疏』吉蔵 隋：

娑婆世界主下第二次列色界天衆。娑婆世界此云雜惡亦云雜會。大梵天王名尸棄者。有人言。大梵天王即初禪梵王。尸棄即二禪梵王。光明大梵即三禪梵王。言等者第四禪也。光宅所用是也。有人言。娑婆世界主者摩醯首羅第四禪梵王也。尸棄者三禪梵王也。光明者二禪梵王也。等者初禪梵王也。今依智度論第一卷云。娑婆世界主梵天王名尸棄。娑婆世界主。此舉處以顯其爲主也。大梵天王出其位也。尸棄者標其名也。新金光明亦作此釋。尸棄者此云火。有人言。此梵天王入火光定。頂有火光故言火也。有人言。餘梵天皆爲火災所燒。獨此天火災不燒故云火也。又翻爲頂髻。有人言。頂上有火如髻故云頂髻也。長阿含云。尸棄是初禪梵王。亦名鳩摩羅伽此云童子天。此天顏如童子故以名焉。手擎鷄持鈴捉赤幡騎孔雀也。問十地經云摩醯千世界主。今云何言初禪梵王爲三千世界主。答有四種梵王。一者經云。百億日月百億梵王百億非想此是下品梵王也。二者智度論云。梵王千世界主。長阿含亦然。此是次品也。三者九地菩薩作梵天王領二千世界。此是上品也。四者領三千大千世界。此是上上品也。魔王轉輪王亦有二種。大集經云。有魔王領三千世界。大品云。化作轉輪王亦領三千世界。故不可一途而判也。問尸棄是大千之王。在何處中間禪住耶。答百億中間禪。今在中央住也。例如佛大千中央住也。光明大梵者二禪梵天也。故二禪稱光音少光無量光也。

であると思われる。

なお、伊藤聡「『法華経』と中世神祇書」特に鎌倉期両部神道書における梵天王説を巡って、『国文学 解釈と鑑賞』、特集「『法華経』と中世文芸」、1997年3月(p. 56a-b)は、なぜ「尸棄」大梵天が重視されたか、という問題に関して、『法華文句』T. XXXIV 1718 ii-2 24b22-24(尸棄者此翻爲頂髻。又外國喚火爲樹提尸棄。此王本修火光定。破欲界惑。從徳立名)や『法華義疏』1721_34,0464c12-16を引いて、「尸棄」が「火」を意味すると解釈されることがある、ということを指摘し、

天照大神は云うまでもなく、元来太陽の化身であり、火徳を体現する存在である。『宝山記』段階において既に火としての「尸棄」の意味が考慮されていたかは定かではないが、少なくとも「尸棄光天女」と云う表現〔『天地麗気府録』などに見える〕においては、これら法華経注疏類に基づく知識が踏まえられていると見てよいだろう。

と述べている。しかし『法華義疏』の文は、『真言宗教時義』の上の引用に、まさにその部分が引かれているので、そこまで遡る必要があったかどうか、あるいは少なくとも『真言宗教時義』のこの引用が大きなヒントになったであろうことは、充分考えられる。

4. 『鼻歸書』「天照太神ヲ大梵王ト習フ」という箇所の典拠：

第三、習^ニ大梵^ト王者、日本記〔紀〕等天逆^ヲ銚下、魔王日本乞^ハ給下給云、欲界頂^キニテ八第六天魔王也、色界頂^ノテ八此人梵^ト王云、此人我等化^ヲ度爲、佛教心^ノ南^ノ天^ノ下^{リテ}一人友思^ヲナス、此念^ニコタエテ一天子又^ル下、是波羅摩^ト云、此三人梵^ハ天南^{シテ}天梵^ヲ字作、毘紐^ハ天胡^{ニシテ}国胡^ヲ文字作、ハラマ^ハ漢土^{ニシテ}海邊鳥足迹見^ノ漢字^ヲ作、此三人理趣^{トク}經三兄弟等説、是經二異説和合^{トク}不^レ取^云知、……

という一節の典拠：

Nobumi Iyanaga, "The Logic of Combinatory Deities: Two Case Studies," in Fabio Rambelli and Mark Teeuwen, ed., *Buddhas and Kami in Japan: Honji-suijaku as a Combinatory Paradigm*, London and New York, Routledge Curzon, 2003, p. 159-173 参照。

T. LXXXIV 2702 i 372a10-16 『悉曇藏』 安然：

摩醯首羅亦有三種。一四禪主名毘遮舍。此乃金剛頂經佛初成道令不動尊降伏三千界主大我慢者是也。二初禪主名商羯羅。此乃大日經中商羯羅天於一世界有自在非於三千界者是也。三六天主名伊舍那。此乃壽命經中佛下須彌令降三世降伏強剛難化天王天后是也。

T. 2702 i 371a14-18 『悉曇藏』 安然：

常騰法華論注云。劫初成時摩醯首羅與毘米復劍和合生子。名婆藍摩。彼有四面説四波陀。頂上有一面説一波陀。四面所説並是世法。頂上所説語深難解。世所行者唯四波陀。

T. 2702 i 368c23-369a1 『悉曇藏』 安然：

慧均無依無得大乘四論玄義言已云。尋十四音者。本是過去諸佛法門。通化道俗法門。而諸佛意正爲出世。不爲世戲論宗也。但諸佛去後。梵天議要三兄弟下欲界如梵書伽書篆書左右下三行書。二種在

天竺國。行化字體猶是梵字右左行爲異也。最弟蒼頡在後下來漢地。黃帝時飛往海邊觀鳥跡造書字名篆書也。

(『無依無得大乘四論玄義』の著者・慧均は、最近まで隋末から唐初の中国の三論宗の僧侶と考えられてきたが、最近、木浦大学の崔鉉植氏が百濟出身の学僧であることを突き止め、現存の朝鮮半島出身の僧侶の書いたものとしては最古の文献であることを発見された。<http://japanese.chosun.com/site/data/html_dir/2006/10/16/20061016000033.html> に記事があり、また kuden-ML で駒澤大学の石井公成氏が報告した。)

上の『大乘四論玄義』の文は、それ自身、次の『出三蔵記集』の引用に基づいている。

T. LV 2145 i 4b1-9 『出三蔵記集』僧祐 梁:

胡漢譯經音義同異記第四。夫神理無聲。因言辭以寫意。言辭無跡。緣文字以圖音。故字爲言跡。言爲理筌。音義合符不可偏失。是以文字應用彌綸宇宙。雖跡繫翰墨而理契乎神。昔造書之主凡有三人。長名曰梵。其書右行。次曰佉樓。其書左行。少者蒼頡。其書下行。梵及佉樓居于天竺。黃史蒼頡在於中夏。梵佉取法於淨天。蒼頡因華於鳥跡。文畫誠異。傳理則同矣。

T. 2702 i 370a10-13 『悉曇藏』安然:

慧均僧正梵王佉樓蒼頡爲三兄弟者。今據理趣經云。末度迦羅天三兄弟。不空三藏釋云。麼度羯羅三兄弟是梵王。那羅延。摩醯首羅之異名也文

なお、上引の『悉曇藏』における常騰の『法華論注』の引用の直前には、次の文章がある。

T. 2702 i 371a12-14 『悉曇藏』安然:

湛然弘決云。大梵天王生八天子。八天子生四姓衆生。刹帝利婆羅門毘舍戍駄。故八天子以爲一切衆生之父抄

これは、湛然の『止觀輔行傳弘決』の次の箇所

T. XLVI 1912 x-i 434a26-b11 『止觀輔行傳弘決』湛然 唐:

……大論云。遍淨天者四臂捉貝持輪騎金翅鳥。有大神力而多恚害。時人畏威遂加尊事。劫初一人手波海水千頭二千手。委在法華疏中。疏云。二十四手千頭少一化生水上。齊中有千葉蓮華。華中有光如萬日俱照。梵王因此華下生。生已作是念言。何故空無衆生。作是念時他方世界衆生應生此者。有八天子忽然化生。八天子是衆生之父母。梵王是八天子之父母。韋紐是梵王之父母。遠推根本世所尊敬。故云世尊。譬喻經云。諸外人計梵王生四姓。口生婆羅門臂生刹利。脅生毘舍足生首陀。中含云。刹利梵志居士工師。名爲四姓。長含云。刹利婆羅門居士首陀。事業皆同名少異耳。

に基づいている。これは、『大和葛城宝山記』の冒頭の神話に直結するものである。また『悉曇藏』は、善珠の『因明論疏明燈鈔』を二箇所ですべて引用しているが(2702_,84,0370a13; 2702_,84,0371b03)、『因明論疏明燈鈔』は、『大智度論』の該当箇所を直接引用しており興味深い(2270_,68,0217a18-29)。

5 . 安然『真言宗教時義』における「降魔」の問題 :

『教時義』巻第四には、大正蔵の三ページ以上にわたって(T. LXXV 2396 iv 432c12-436a1)「降魔」の問題について詳細きわまりない議論を展開している箇所がある。以下、その梗概を示す :

T. LXXV 2396 iv 432c12 で「問。天台云用者力用。破惑爲用」という問が出されるところから降魔の問題に入り、

c21 で「問。先金剛界降魔何。答。……」という形で「金剛界の降魔」について 433c15 まで約 1 ページ、答があり、

次に 433c16 で「問。胎藏界降魔何」という問から、434a3 までが「胎藏界の降魔」についての答、次に、434a4-10 の 6 行で「此有多疑。一者能化有疑（これについていろいろな疑問がある。まず、降魔の主体者〔＝誰が降魔したか〕について）」

次に 434a10-b4 までに「二者所化有疑（次に、降魔されたものについて、疑問がある）」という二種類の問が出さる。

それぞれ 434b5-435a16 までの 1 ページ弱が「能化」(降伏者)について、

435a17-436a1 までの 1 ページ弱が「所化」(被降伏者)について、さまざまな引用文とともに答が出される。

そのもっとも重要な結論は次の一節に見ることができる。

T. LXXV 2396 iv 434b21-25 『真言宗教時義』安然:

今眞言宗四身土中皆有魔王。但自性土本來降伏。受用身土成佛後降。變化身土先降後成。等流身土不成常降。魔界如也。佛界如也。一如無二如者是自性土中眞如降魔也。

6. 梵天を「一切衆生父」などの表現で、創造主として示す箇所:

T. I 1 xxii 145a5-19 『長阿含經』 仏陀耶舎, 竺仏念 後秦:

佛説長阿含第四分世記經世本緣品第十二佛告比丘。火災過已。此世天地還欲成時。有餘衆生福盡行盡命盡。於光音天命終生空梵處。於彼生染著心。愛樂彼處。願餘衆生共生彼處。發此念已有餘衆生福行命盡。於光音天身壞命終生空梵處。時先生梵天即自念言。我是梵王大梵天王。無造我者我自然有無所承受。於千世界最得自在善諸義趣。富有豐饒能造化萬物。我即是一切衆生父母。其後來諸梵復自念言。彼先梵天即是梵王大梵天王。彼自然有無造彼者。於千世界最尊第一。無所承受善諸義趣。富有豐饒能造化萬物。是衆生父母。我從彼有。彼梵天王顏貌容狀常如童子。是故梵王名曰童子。

T. XLI 1823 xxx 842c19-25 『俱舍論頌疏』 円暉 唐:

如經中説。大梵天王。處自梵衆。忽被馬勝苾芻問言。此四大種。當於何位。盡滅無餘。梵王不知無餘滅位。便矯亂答。我於此梵衆。自在作者。化者。生者。養者。是一切衆生父。作此語已。引出衆外。諂言愧謝。令還問佛解云。大梵天王。不知依未至中間四禪。此六地中。

T. LIII 2121 i 3a18-28 『經律異相』 宝唱 等 梁:

大梵天第四大梵天王。名曰尸棄梁言火已與前天同。若修上禪則生此也。於梵衆中發大音聲。一切大衆無不知者。梵身諸天各自念言。大梵天王唯與我語不接餘人。我自然得無所承受。於千世界最得自在。富有豐饒能造化萬物。我是一切衆生父母。後來諸梵第一尊重。顏如童子。名曰童子。擎鷄持鈴捉赤幡騎孔雀。初禪名曰梵迦夷。有宮去於他化自在宮。由旬一倍出長阿含第二十卷花嚴樓炭大智論雜阿毘曇心云色界十七居止下三禪各有三天四禪有九天應有十八謂初禪下天是諸梵奴故不數也初禪無梵身二禪無光三禪無淨

など。

7. 平田篤胤は中世神道の(とくに「麗気記」などの顯著に現われている)「梵天王思想」を知っていたか:

『現代語訳麗気記』の巻末に、森瑞枝「近世における『麗気記』」(p. 528-536)という論文があり、ここに、江戸時代に『麗気記』がどのように受けとめられたか、という問題について述べられている。江戸時代には『麗気記』の写本が作られ版本も出ていて、相当に普及していた、さらに、

主だった考証学者も国学者も『天地麗気記』を見知ってはいた。しかし、彼らは『麗気記』を資料として用いることはなく、批判対象にすらしなかった。つまり、稀書として蒐集はし、目録に登録はしても、自らの学問的営為においては一顧だにしなかったのである。わずかに平田篤胤が『天地麗気記』の内容に分け入って、批判しているのが目に付くくらいである。

と述べられており(p. 534)そこに付された注6で「『俗神道大意』(『平田篤胤全集』第七巻所収)など」というリファレンスが挙げられている。

『俗神道大意』は篤胤独自の講談調の書物で、第1巻と第2巻が「両部神道」の批判、それ以降が「唯一神道」の批判、になっている。書かれた時期は、おそらく『出定笑語』(1811年=篤胤36歳)の前後だろう(中川和明「平田篤胤の『俗神道大意』の形成と刊行」、『復刊東洋文化』93/無窮會、2004年9月、という論文があるが、未見)。

『俗神道大意』は、篤胤の中世神道観について考えるには不可欠の書である。篤胤はまず、「神道」という語の意味を五つに分け、第一に「真の神道」、第二に「今の世の神道家」が言う「祓祈禱などのわざ」、第三に「漢籍」に言う「天の神道」、すなわち「天然の神道」、第四に「両部神道」、第五に「唯一神道」を挙げて(p. 113b-116b)、「両部神道」の批判に移っていく。彼が言う「両部神道」は、今日で言えば「両部神道」と「伊勢神道」の両者に当たるだろう。最初に、「両部神道」という用語が、当時の人々にどのように受けとめられていたかを示す、興味深い一節がある(名著出版、全集8、p. 116b)。

.....但シ世人ノ心得テ居ル所ハ、天ノ下ノ神社ノ中ニ、神主祝部社家ナド云類ヒバカリ仕ヘテアル社ヲ唯一ト心得、ソレニ法師ノ交ツテ仕ヘラル社ヲ両部ト云フガ、両部ト云名目ハ、元来サウシタ訣デハナイ。カノ空海法師ガ弘メタル真言ノ宗旨ニ、金剛界胎蔵界トイフニツノ訣ガ有テ、コレヲ金胎ノ両部ト云ヂヤ。カノ謂ユル両部神道ト云ハ、コノ両部金胎ノ旨ヲ、神道ノ事ニ習合シテ造リ立テ、神八仏ノ垂迹、仏八神ノ本地ヂヤト云テ、世ヲ欺キ人ヲ誑カシタモノヂヤ。

森氏によれば「本居宣長の『玉勝間』でも、「両部神道」を〔中略〕神と仏で両部、と称していると書いて」といるという(kuden-ML 2007年2月14日付けメッセージ)。これに続いて、篤胤は次のように書く(p. 116b-117a)。

サテ其書ハ、マツ古ク八天地麗気記ト云モノ十八巻、(四本)コレハ始メニ空海撰ト有ルガ、天野信景ガ説ニ、コレハ麗気灌頂ノ書ナドヲ本トシテ、後人ノ空海ニ託シテ、偽リ作ツタ物デアラウト云タガ、[p. 117a]実ニサウト見エテ、末ノ処ヘ行テハ、空海ノ言クナドト云コトモアルカラ、空海デハアルマイナレドモ、何レ空海ガ説ヲ受ケツイデ、両部神道ヲ弘メントスル奴ノ、作ツタモノトハ見エル。マタ両部神道ニ図ト云物モ有ル。コレモ空海ガ作トイヒ伝ヘ、コノ余ニモ種々カヤウノ

書ドモガ有テ、サテ其書ドモニ云ヘルサマハ、聖徳太子、舍人親王モミナ両部神道ナリ。空海諸道二通達シテ、神道ノ奥義ヲキハメ、コノ両部神道ヲ中興セリ。嵯峨天皇コレヲ觀感アツテ、両部神道ト云号ヲ下シ賜ハツタナトドアル。

この後「両部神道」の批判が続く。しかし、『麗気記』そのものを実際に読んだ、という証拠は見つからないようである。篤胤が引用しているものには、日蓮宗の『神仏冥応論』あり (p. 121a-b) また『沙石集』の巻頭の第六天魔王神話は明らかに読んでいる (『本教外篇』、全集 7、p. 28a では題名を引いている箇所があり、『俗神道大意』 p. 147a-b や『玉たすき』、全集 6、p. 16-18、『印度蔵志』、全集 11、p. 277a にも引用や言及がある) 、「神道五部書」の題名や『宝基本記』からの大量の引用もあるが (『俗神道大意』 p. 148b-158b)、『麗気記』については、題名はたしかに挙げられているが、内容をどの程度読んだか、疑わしい。あるいは、読んでいても理解しようとする態度が最初からなかったから理解しなかったのかもしれない (同様のことはわれわれ自身にもあり得ることで、自戒しなければならぬことですが) (なお、篤胤があげている『両部神道二図』が何を指しているか、明らかにできなかった。ご教示いただければ幸いです。)

「神道五部書」に関しては、p. 148b-149a に

……ソレハイカニト申スニ、尾張ノ国ノ東照宮ノ神主、吉見左京ノ大夫幸和ト云人ノ、寛保年中二著ハシタル、五部書説弁トイフ書ガ十二卷アル。ソレハ [p. 149a] ソレハ委ク弁ジラレタモノデ、丁ドカノ仲基ガ諸仏経ヲ、阿含ノ次ニ般若ガ出来、般若ノ次ニ法華経ガ出来タリト云コトマデ、慥ニ見ワケ安ク書レタヤウナモノデ、其説ニ、宝基本紀ガ、イツチ始メニ作ツタル偽書ト見ユルト云テ、其考ガ有ルガ、ヨク見抜レタコトデ、実ニソウヂヤ。

とあり、吉見幸和の『五部書説弁』に大きく依拠しているようである (『五部書説弁』は「度会神道大成」後篇に入っている) 。詳しくは、両方を比べてみる必要があるだろう (なお、篤胤が富永仲基の『出定後語』を入手したのは、1803年ごろと見られているので、『俗神道大意』は少なくともそれより以後、と考えられるだろう) 。

『俗神道大意』での篤胤の独自の説は、密教は空海が仏教を日本の環境で、神道との対応を計って流行らせるために「偽作」したものであって、本来の仏教ではない、という「奇説」である。篤胤によれば、「毘盧遮那」という語は華嚴経に出ているが、「大日」という語は不空などよりずっと後の宋代の法雲による『翻譯名義集』に出ていない、よって、それは空海が「大日靈尊ノ大日如来ニ似タル」ことに基づいて「偽作」したものだ、という (p. 141b-147a and sq.) 。

換言すると、篤胤は密教と神道の類似を認めた上で、それは空海が密教を神道に似せて「偽作」したからだ、と主張している。この密教観と、『印度蔵志』におけるそれとでは、まったく違っている。『印度蔵志』では、篤胤は、釈尊が仏教そのものを「偽作」したのであって、密教は偽作された仏教の影響を受けることが比較的少なかったゆえに、「印度の古伝」を忠実に伝えている、それゆえ (それと本質的に同じものであるはずの) 「皇国の古伝」とも近いのだ、と主張する。このように、篤胤は、まったく違う議論を立てながら、結論としては、密教と神道が近い関係にある、ということを確認している。篤胤の最終的な考えは、『印度蔵志』のそれに近かっただろう。彼の密教学の結実は、『密法修事部類稿』という大部の原稿に見ることができるが、これは各種の密教儀礼から、儀礼の要素ごとに多くの儀軌の引用を集めたもので、きわめて特殊ではあるが、おそらく現在でも大いに利用価値のある研究だと思われる。これは、篤胤にとっては、神道の靈的 / 呪術的な側

面を追究するために行なった研究で、われわれの目から見れば明らかに密教学に属するものだが、彼自身には神道学の核心に触れるものだったと思われる。これらのことは、篤胤の「神道」が、彼自身の意識的な意図とはまったく逆に、中世神道や密教に非常に近いものだったことを意味しているといえるだろう。